
僕の妹が、こんなに友達が少ないわけがない

田中数奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の妹が、こんなに友達が少ないわけがない

【Zコード】

Z3605V

【作者名】

田中数奇

【あらすじ】

星奈が画策した「魔法少女」オフ会に、参加することになった小鳩。しかしそこは当然ながら一筋縄でいく集まりではなく……。

「僕は友達が少ない」の一次創作です。

前篇（前書き）

前回の作品が高校組だけだったので、今回は中学生メインでいきた
いと思います。

小鳩ちゃんと……誰でしたっけ？

題名はあれですが、「俺の妹が」のクロスオーバー、あるいはパロ
ディというわけではないのでご注意。

どうぞ肩の力を抜いてお読みください。

それはある日の放課後だった。

「へえ、それじゃあ……」

「はい。理科はそれがいいと思います」

俺、羽瀬川小鷹がいつものように隣人部の部室にやつてきた時。

部屋の中では、珍しい光景が広がっていた。

理科と星奈の二人が何やら熱心に話しこんでいたのだ。

夜空は図書室に借りた本を返しに行くことで、今はいない。

部室には俺と星奈と理科と……あ、幸村もいた。

肝心の一人は、此方に背を向ける形になつていて何を話しているのかはわからない。

とはいって、こいつらが話している内容と言えば決まっているだろう。どうせギャルゲーの話だろ。とおもい、ちらりとパソコンの画面を見てみると、どうもそういうわけではないらしい。

どうも何処かのウェブサイトを見ているみたいだ。てかここネット繋がったんだ。

「まあ、多分攻略するんならそのルートが一番いいと思いますね」少しだけ耳をそばだててみるが、やはり要領をえない。ギャルゲー的な専門用語か？

仕方なく俺はソファーに体を沈めて、文庫本を開く。
こういう時に割つて入れないから、リア充になれないんだろうなあ、とか思いながら。

それからまもなくして。

「とりあえず、さっそく準備してみるわ」

それじゃあ、と言つて星奈は鞄をつかんで帰つてしまつた。まだ全

然日が高い内に。なんだ、これまた珍しい。俺は思わず理科に話しかける。

「どうかしたのか、あいつ。……いや、いつもどうかしてるけどさ」「おっとセルフ突っ込みは止めてくださいよ先輩。先輩は理科につっここんでくれないと、理科困っちゃいます。あ、なんなら別のところにつっここんでくれば理科的にはオールオッケーなんで、いつでもどうぞ」

こいつもどうかしていた。

「で、何の話してたんだ？おまえらがあんなに話しこむなんて、珍しい」

隣人部の面々は、仲良しによしというわけではない。「友達づくり」がモットーになるような部活ではあるが、いやむしろそんなものを目標にしている連中らしく、集まったメンバーはいずれも個性的かつアグが強い。そして協調性に著しく欠けている。

いや、俺は違うが。しかし「それならなんで友達がないの」とか聞いてくる奴とは友達になりたくないでの答えない。

まあとにかく、仲が悪いのは星奈と夜空なのはともかくとして、普段はお互いあんまり興味がないような付き合いが多い。みんな部室内では我関せずで各自好き勝手にやっているのが常だし。

星奈みたいにパソコンでゲームしていたり、今俺の後ろに居る幸村みたいにぼうつとしていたり。

なので、さつきみたいな談笑は珍しい。

「いえいえ。ちょっとなんていうか、いろいろとアドバイスをしていただけですよ」

「アドバイスって……ゲームとかのか？」

まさか勉強ということはないだろう。理科は相当頭はいいが、星奈もあんな奴だが勉強はできる。

俺の質問がおかしかったのか理科は脱力したように笑いながら、「

まあ、そんなんとこりです」と応じた。

「キヤラをどうやって攻略すればいいのか、迷っているみたいでしたので。参考になりそうな話を、ちょっとしてあげただけですよ」

「ふうん」

まあアレ系のゲームの良さは、俺にはよくわからん。まだまだ剣と魔法の世界に憧れるお年頃だ。

「詳しく聞きたいですか？ 理科と星奈先輩のひ・み・つ

「いや。ま、それならいいよ」

理科の喜色悪い声音に、一瞬で興味が失せた。そですか、と理科は肩をすくめた。

仲良きことは、美しきかな。もしかしたら今後生まれるかもしれない友情を感じながら、俺は文庫本に視線を落として、その話は終わりになつた。

思えば、これがこれから起ころる出来事の発端だったわけだが……
今の俺には知る由もないのだった。

*

さて後日。

暇だということで久々にやつてきた小鳩を部室に連れてきた俺は、

「ねえねえ小鳩ちゅわ～ん」

と、気持ち悪い猫なで声でにじり寄る女と出会つた。よく見たら星奈だつた。

並んで歩いていた小鳩が、一瞬にして俺の後ろに隠れた。

「うー

威嚇しているようだが、それは逆効果だつたらしく、星奈は鼻息も荒く手をワキワキさせていた。

「ああ、ラブリーマイエンジェル、小鳩ちゃん……は、いけない

いけない」

と、突然正気をとりもどして、俺たちを部屋の中へ通してくれた。
「さあ、入つて入つて。ちょうどよかった。実は、話したいことが
あつたのよ」

嫌な予感がビンビンにしながらも、俺たちはソファーに腰掛けた。
部室には理科がコンピュータをいじくり、夜空が一人文庫本のペー
ジをめくっていた。

「実はね、今日は小鳩ちゃんにお願いがあつてきたのよ
手を合わせながら、星奈はそう切り出してきた。

「実はね。私が参加しているSNSのサイトで、今度ちょっとした
集まりがあるのよ」

SNS?と、俺が訪ねると、理科が解説してくれた。

「みんながウェブ上に自分のことを書いたページを作つて、互いに
交流するサービスのことですよ」

「ええ。そんなのがあんのか。

「それで、みんなで趣味だとかテレビだとかの話をして、お友達にな
つたりするんです」

ほう。それは家に帰つたら、さつそく調べてみないといけないな。
と、記憶のメモ帳に赤丸を付けながら、話に耳を傾ける。

「そこで実はあ、私も「魔法を使える中学生の女の子集まれ」
ミコニティに参加してたの。最近ね」

「魔法をつて……」何を言つてるんだ

もうそれだけで特殊な集まりなんだらうことはよくわかつた。
ついでに、星奈も特殊な類の人間なのだと改めてカテゴライズする
必要があるあるようだ。

星奈は俺の目つきがうるさいになつてゐるのに気が付いたのか、慌てて
手を振つた。

「いやいや、私も小鳩ちゃんと仲良くなりたかつたから、色々と相
談してたのよ。どうすれば仲良くなれるのか、教えてくれない?つ
て」

なるほど蛇の道は蛇か。まあ、確かに今のところ小鳩に嫌われまくつている星奈にしたら、その相談はもつともだらう。まあ俺から見たら、嫌われてんのは普通に星奈の態度が悪いんだが。

「そしたらね、みんながその子と会いたいって。同じ年頃の魔法少女の子たちが、みんなそう言つてゐるよ。レイシスちゃんなど、あつてみたいって、興味があるって話になつて」

「くつくつく。闇の眷属たる我に、面会を申し出るとは。愚かな」と、口では威勢のいいことを言つて見せる。

「それで、その子達が今度近所で集まるらしいんだけど、それにこば……レイシスちゃんも、一緒にお茶でもしない?って話になつたの。どう、レイシスちゃん」

「ふつ。魔法少女は一人でよい……」

などと黄昏ではいるものの、どうにも元気も視線は俺の方へ向いている。

仕方がない。ため息をついて、俺は言つた。

「お前なあ。そんな見ず知らずの集まりで妹のことは話して、そいつらに合わせてほしつて?」

「そうそう。是非是非、小鳩ちゃんには、この連中をややふんといわせてほしいのよ。」

「おこ、待てよ。そんな不得体の知れない集まりに、うちの妹を勝手につれていつていいと思つてるのか?」

こうこう場合には、さすがに俺だつてガツンとこわねばなるまい。あんまり勝手をされてもたまらない。

すると星奈は、ちょいちょいと近づいてくるよつとシロスチャーする。

俺と星奈はふたり顔を近づけて、じつわり話す。

「なにいつてゐるのよ。あんただつて、小鳩ちゃんに友達が出来た方がいいと思つてゐるんでしょ」

「せりやせりうだけど……。てか、最初から合わせようとしたのか?」

「だからあ、小鳩ちゃんに趣味の合ひお友達ができたらいなあって、そう思ったのよ。小鳩ちゃんの姉的な存在として」

だからなんでお前は勝手に羽瀬川家に混ざつてくるんだ。星奈はその大きな瞳でこちらを見つめながら力説する。

「のために、わざわざそんなインターネットを使つたりしたのか？」

「わうよ。わづこつ風にすれば仲良くなれるって、書いてあつたもの」

書いてあつたって……どんなマニアカル本を読んだんだろう。

「邪氣眼と仲良くなる方法」「「スロリ少女の落とし方」「妹ティマニア」駄目だろくなもんじゃないだろこれ。

「……もう一回確認するけど、中学生の女の子ばつかなんだよな」「ええ。みんな小鳩ちゃんとだいたい同じ趣味……だし、仲良くなれると思うわ。クロネクの話もしてたし」

クロネクというのは、「鉄のネクロマンサー」の略で、小鳩が好きなアニメもある。

そうなると、うーん、と俺は考えざるをえない。友達作りにもいろいろあるが、こいつのはどうなんだろうか。

もともと部活というのも同じ趣向、同じものに対して情熱をもてる人間が集まる場所だ。そうなると、むしろ小鳩くらいになると、同じようなオタク気味の趣味の女の子たちと仲良くなつた方がいいんだろうか。

しかし、この状態が続くとこりの問題な気がするな。

俺の不安をよそに、星奈は熱弁を続ける。

「心配しないでつて。もしものために、私がちゃんと小鳩ちゃんにこつそりつこついて、様子を窺うから」

それにゃ、と眉を吊り上げられる。

「あんただつて、友達がほしいんでしょ。小鳩ちゃんだつて、そつ思つてるに決まつてるじゃない」

それをいわれると、俺としてもぐうの音もでない。

しかし小鳩の意思でないか……いや、しかし……

「ほん、と誰かがせきぱらじをした。

「ま、まあ、自分のことば自分で任せればいいんじゃないか
突然話しに割つて入つたのは、夜空だつた。

「そつよねえ。あんまり過保護な兄つてこいつのは、どうかと思つわ

「つ、うむ、そうだ。だから、ほり、話しあつのはこいだろ？ もう」

と、夜空はなぜだかひきつった顔で云つ。俺はそれを言われて、自分が星奈と顔を突き合わせて話しあつをしてこたことに改めて氣付いた。

「わつ……」俺と星奈はぼぼどづじに飛びのいた。

「え、ええとや。まあ、夜空がそつにうんなら、俺も云つのはやめにするよ」

「え、そ、そつね。やつぱりそつすべきだと思つわ」
さじをなげたわけじゃないぞ。普通にそれで構わない、と判断しただけだ。お互い気まずい感じになりながらも、一応合意に達した俺たちは小鳩の方を見たのだが、

「や」

と、小鳩は素に戻つて簡潔な答えでもつて星奈を拒んだ。
が、さすがとつべきかなんといつべきか、星奈はそれでも折れなかつた。

「い、いいもんよ～友達は、ねえ。小鷹。兄として、妹さんに言つてあげてよ」

ええ……。お前、それを友達がいない俺に言わせるのか。
KY力こに極まれりだ。しかしふられた以上は、何かしら口メントを返さないといけない。

「ええと……まあ、あれだ。居ないよりは、いるほうが、いいと思つ……がな」

「クク、そんなものがいたとして、一体どんな対価が得られると思うのか。愚民よ、答えてみよ」

具体的な話をしろ、と言われてもな。なんだか胃が痛くなる。と、胃袋からふと連想した光景があつた。

「ええと……そうだ、ラーメンとか。ほら、帰り道にいつしょに食つて帰つたりや。そういうのができるんじやないか、ないや、喰つたことないけどや。」

このまえのどきメモで、そんな感じのシーンがあつて、地味に憧れていた。

しかしそんな俺の照れをよそに、小鳩はじばしゃみとした後で、なぜだか顔を伏せてしまった。

俺たちはそんな小鳩に戸惑いながらも、お互に視線を顔を見合わせる。何かまずいことをいつてしまつたのだろうか。しかしみんな首をかしげるばかりで、答えは出ない。俺が何か言おうとしたところ、

「クックク。まあいいだり。わが姿を、久しぶりに地上のものどもに見せつけてくれよう」「ひつた。

「ああ、ありがとう小鳩ちゃん!」

抱きしめようとする星奈を交わしながら、妹は脣をゆがめる。

「クク、まあいいだり。己の力を過信した愚か者どもに、その身の程を思い知らせてやるとしよう」「ひつた」と悪役っぽい台詞をのたまつのだつた。俺は先ほど見せた小鳩の態度になにか引っかかるものを覚えつつ、その言葉にため息をついた。

果たして、友達づくりが成功するのやう。

「ふん、そんな田論見通りにいけばいいがな」このときの夜空の言葉が、まさか本当に的中するとせ、今の俺には思ひも……あ、これやつをやつたつけ。

まあそんな感じだったとせ。

*

そしてオフ会の当口。

「小鷹あ……」

受話器を取った俺のもとに

「た、助けて……」

星奈からのSOSが届いたのだった。

厨編（前書き）

この物語はフィクションです。実在の人物、団体、企業などは一切関係ありません。

「……ええ。そうです。理科はアドバイスしましたね。星奈先輩に「んでアドバイスつて、お前……そもそも何を、聞かれたんだ？」いや、答えてもいいんですけど、そもそもわざわざ理科に電話しなくても、本人に直接聞いた方が早いんじゃないですかね」

駅のホームで、俺はため息をつく。

星奈からの突然の電話。その剣幕に押されて大急ぎで俺は家を出た。そして今、星奈が居る場所 小鳩がピンチだという場所へ向かう電車に乗り込もうとしている。

「まあ。そうなんだが。……どうにも、あいつの話は要領を得ないんだ」

雜踏の中、しかも整理されていない情報をあれこれ聞くのは骨が折れたうえに、何やら一旦移動するから、ということで電話を切られてしまっていた。

そんななかでも事の経緯を聞くと、いくつか「理科」というキーワードが出てきたのを俺は聞き逃さなかった。かくして、今こうして理科と電話して間接的に情報収集に当たっているわけだ。

「わかりました。んで、私が聞かれた内容といつのは、あるライノベルのストーリーです」

「ライトノベルの？」

それが一体、どう小鳩につながるのか。

「まあ厳密にいえば、その中で小鳩ちゃんによく似ていると思しきキャラについての情報ですね」

「おまえ、それはまさか……」

「ええ。なんでも本を拾つたという話をしていたので、その内容を教えてあげたんです。なにやらその中に、中一病で邪氣眼のキャラが出てくるという話をしたら、ひどく興味を示しまして」

うわあなんだかもう聞きたくない。しかし、小鳩に関わる話だ。聞かなければならぬ。

「ええ。そのキャラは、ネットで同じオタク趣味の仲間とのオフ会を通じて、主人公と仲良くなるのだと教えてあげたんです。それを実際にやつてみたら、小鳩ちゃんが自分と仲良くなれるんじゃないのかつて、柏崎先輩えらい興奮していました」

あちゃーそれでか。いや、その小説なら知っている。といふか、俺も読んだ。

しかも、どこかで失くしていた。

……どう考へても、俺の本だよな、それ。

流行つてゐるらしいので眼を通してみたのだが、思ったよりも地味な内容だったの、流し読みしていたのだが。

つまり今日小鳩が向かつた先といふのは、つまりはその、趣味の集まりといふことか。

「まあ、なんとなくはわかつた。あ、電車が見えてきた。そろそろ切るぞ」

「あ、待つてください。柏崎先輩に聞いたつていうサイトのアドレス、こつちに転送してくれませんか?なんなら、ちょっと調べておきますから」

「ああわかった。頼むよ」

それだけ言つて、携帯をポケットにしまつと、俺は電車に乗り込んだ。

待つてうよ、小鳩。

*

そんなわけで、電車に揺られて十分ほど。
俺はメールで指定された場所にむかつた。
駅にほど近い公園の一角。そこの中手に、星奈がいた。

「「」、小鷹。来てくれたのね
と、ほつとした顔を見せる

自転車と電車を乗り継いで、大急ぎで駆けつけた俺は、星奈の顔を見て睨む。

「おい、星奈。どうじうことだよ、助けてって」

「そ、それが……その、小鳩ちゃんがオフ会に参加したんだけど、待ち合わせ場所がここなんだけど、その……」

星奈は茂みから公園の中をゆびさした。俺はその方向へ視線をやる。

「な、なんだありやあ……」

それは、異様な光景だった。

そこにいたのは美少女の群れだった。

つぶらな瞳。よく手入れされた、カラフルな髪。短めのスカート。相変わらずのゴスロリの小鳩ももちろんそこにいる。

その小鳩と並んでも、遜色ないような色とりどり美少女達の群れ。なるほど、かわいいと言えばかわいいのかもしれない。世間一般的の常識に当てはめても、その格好は確かに目立つ少女のものだ。

それが着ぐるみでなければ。

*

「……で、どういうことなんだ、これは」

「うう」

と、星奈は唸つていい。

「「」、小鷹、怒ってる?」

とんでもない集まりに小鳩を巻き込んでくれたものだ、とは思つ。本来ならば怒つてもいいのだろうとは思うのだが、なんというか、

その……まあ、怒りを覚えるにも正直あの姿では、毒氣を抜かれてしまう。

うんまあヤバいと言えばあんなもんを着て往来を歩きまわってるあたり、どう考へても混じりッ氣なしにヤバいのだけれど、なんだかなあ。

「……まあ、それはそれとしてさ。なにがあつたんだよ」「

「だから、その……小鳩ちゃんを集まりにつれてきたら、その……あの人たちが来て、お待たせはわわーん！とかいつて来て……」

「つまり……あの面子が、お前がネットで紹介したとかいう「お友達」だったわけか」「

「ど、どうやらそつみみたいね……お、大きなお友達だったわけね。うはは」

「……なんだろう、このザラツとする感じは。

「で、一体どういう集まりなんだあの連中は」

「だから……魔法少女」

俺と星奈の間を、冷たい風が吹き抜けて行つた。

「だ、だから女子中学生限定つていう触れ込みだつたの。だから私も思つ存分はあはしながら、掲示板で喋つたりしてたんだけど……」

「それで一体どうやつて、あんな一人テ ズニーランドみたいなことになるんだよ……」

そこで俺の携帯が振動するのを感じた。理科からの着信だつた。

「どうも、理科です。……はい、確認しました。星奈先輩の言つているサイトですね。うわあ……あ、これは、ホントだ、きぐるみなりきりサークルですね」「

「そりゃいつたい何なんだ？」

俺の困惑に対し、理科はおもむろに語りだす。

「ええ、世の中には一次元、フィクションの女性キャラへの愛が高じて、そのキャラ自身になつてしまいたいという男性が多くいます。

それをサイバースペース内ではあたかもそのキャラであるかのようにふるまつ「なりきり」というプレイが可能になりました。しかし最近、それがさらなる進化を遂げつつあるわけです

「それがあの……」俺はもう一度ため息をつきながら「さぐるみつてわけか」

「そういうことです。じつこ遊びの一種ですね。顔や肌を露出しないので、ある意味コスプレなんかよりもクオリティの高いなりきりを楽しめます。まあ全身を覆うつていうのはそれなりに大変ではあります。魔法少女として不適切な行動をとった会員は、退会もありますが、ある意味別人になりきれる、という意味ではこれほど楽なものはありません。最近ちょっとずつ流行つてているみたいですね」

なるほど。さっきから聞こえてくる声がどれも男の声に聞こえてくるのは、そのせいなのか。

これは流石に日本オワタと言わざるを得ない。

「理科もたまに、ビグムになりたいと妄想することしきりですから、あまり迂闊なことは言えませんが……」「……」

せめて人型にしておけよ。

「まあとにかく、彼ら自身が実際のどいうどいつであるのかは正直分かりませんね。やりとりは確かに、うん、女子学生のかわいらしい心なごむゆるい感じではありますが……まあ、その文字をタイプした手は指毛とかボーボーだつたりするんでしょうね」

止めてくれ。頭が痛くなつてきた。

「まあ、何も全部が全部悪いとは言えませんよ。サイトの規約もあります。魔法少女として不適切な行動をとった会員は、退会もあ

りえる、と」

「そうか。いや、確かにこれまでのやり取りを見る限りでも、彼ら、いや、彼女ら?の行動は乙女そのものだ。両手を合わせて大仰に反応したり、しなを作つて見せたりする。

クラスでもふりつこと言われるちょっと痛い系の女子がとるタイプのオーバーリアクション。

てこうか、表情が固定されていながら、めちゃ怖いんですけビ。とにかくだ。

つまりは……その、「なりきりキャラ」といつ部分に、女子中学生とこうのも含まれていたわけか。

で、中身はとんだダークマターとこうことが予測される。

「とにかく、理科はもうちょっとサイトの方を調べてみますね。なにやら会員専用のページとかあるみたいですし、情報を集めてみます」

そんなわけで、理科との電話は一旦切った。

まったく、どうしたものか。俺はちょっと考え込んだ。

今のところは何ともないようだけれど、あの中に飛び込んで言つて、無理やり小鳩を家に連れて帰つたりするべきだらうか。

しかし、今のところは何ともないし、それに一応小鳩も自分の意思でついて言つているように見える。いつそ見た目分かりやすくチャライ男ばっかりだと、不良だとからら、もう少し事は簡単だつたんだが。うーむ、対人関係のあれこれはさじ加減が難しいな……。

「ね、ねえ。小鷹。……あれ」

そんな考える俺の袖を星奈が引く。

その指差す先には、ファミレスに入つていいく魔法少女軍団の姿があつた。

*

ファミレスは、異様な雰囲気に包まれていた。

「えー、それでは、わたくくなりきり板の魔法少女のお茶会を、はじめたいとおもいまーす

店の一角は、もはや異次元空間と化していた。そこだけ着ぐるみの一段が占拠していいるのだ。お店の人たちも開いた口がふさがらない。

近くに座っている客達も戦々恐々としている。ていうか、どうしてなかにいたし店員。

俺と星奈はそこからほど近い、観葉植物が障害物になる場所を選んで陣取った。

とにかく、事の経緯を見守つてから行動を起こすことにしよう。

「――「イエーイー!――」」

テンション高いなこいつら。みんな全身を揺らしながら手を叩いている。

そして一人テンションの低い小鳩は、なんだかんだ言つてみんなの中心に座らされている。

どうやら小鳩は戸惑いと驚きで、ほとんど言われるまま為すがままの状態になつているらしい。

あいつの人見知りがこう悪い方に進むとは……。

此處にくるのだって、昔見たMIBに連行されていく宇宙人を思い起こさせるような様子だった。なんというか、悲哀を感じさせる背中だった。

「だいじょうぶですかにゃ？レイシスたん」

と、……いや、声は明らかに成人男性のあるボイスだけど。ええと、とにかく一人が声をかける。

「……っ!?（こくこく）」

と、顔を近づけられてぎょっとしながらも、必死に頷く小鳩。あれは虚勢を張つているつて感じだな

「はーい注目」

と、そこでピンク色の髪の毛をした少女の恰好をした人（長え）が、手を叩く。

「それじゃあ改めて、自己紹介をしたいと思いまーす。あ、もちろんプライベートな質問や、バストウエストヒップが知りたかつたら

……設定資料集を買ってね」

品を作つてそういうピンクに、皆がどつと沸く。おいおい、それ自己紹介の意味が果たしてあるのかというつっこみをする者は誰もい

ない。

しかしある「普通の空間で、よくあんな感じで話せるものだ。
死にたくないのか。

「ではまず。ラードチャプター朝倉だによりん！まだ中学生だけど、
大好きなお兄ちゃんのためにがんばるもん！」
俺が死にたくなってきた。

*

「ま、まあまあ落ち着きなれよ。たとえ着ぐるみでも、眞中身は
女の子なのよ」

「おっさんだ！」

「いや、そうじゃなくて…心…心の問題よ。みて、あの雰囲気」
言われて、改めて集まりを見てみる。確かに容姿こそ威容だが、そ
の場に流れている空気自体はな「やかなものだ。
そうだな。いや、まあ確かにたとえなりきりとはいって少女のふりを
しているわけだし。

「ね？ね？」

「そうそうおかしなことにはならないかな。

「はじめまして。明美モリです。好きなものは、かまびのおじつ
こじつ」

「一ヒー吹いた。黒髪少女……の着ぐるみを着た人は、まんじりと
もせずにいる。「冗談ではないらしい」

「レイシスさん。よろしくね」

「くくくくくく……よろしくなのだ」

これには小鳩もドン引きである。

「もお、「モリ君がんつてば」

「うふふ」

一体どんなアニメ、ゲームなんだ？。ちよっと小鳩には見せられ
ないな。

俺は黙つて、星奈をにらみつけた。星奈はあさつての方向を見ていた。

*

と、いう感じで、ちょっとした予想外のやり取りにはなつたものの、あとの自己紹介はさらりと進み、

「魔法少女、かまどマジかです。うえへへへへええ。みんな、仲良くしてくれたらうれしいなって」

そう言って、首を傾けるピンク少女で、最後となつた。

くそ、声は明らかに男なのに、仕草と見た目だけ見れば美少女をトレースしてるのが腹立つ。

と、いう「痛い」という感覚がびしひとそのまま俺の体にまで飛んできて、激痛にさいなまれる時間が続き、最後の一人というタイミングになつた。

「それから、最後はまさかのノーチラスです。どうぞ…」
場が一気に盛り上がる。黄色い歓声ではあるんだけど、発せられる声はどれも太くて……なんか茶色い歓声、といった方が正しい気がする。そんな中でもうふらふらになっている小鳩が、よろよろと立ち上がる。

「く、ククク。わが名はレイシス・ヴィ・フェリシティ・煌。真祖の吸血鬼であるぞ。今回、特別に地上の戯れに参加してやることにした。か、感謝せえよ」

いかん、早くもキャラが崩れきっている。小鳩もビビッているのは間違いない。

まあ俺も正直、あの面子四方からガン見されたら、ちびらない自身はないが。

「わー！よろしくね、レイシスちゃん」

とはいって、普段ならドン引きされるか冷笑されるかの自己紹介でも、

彼女ら……彼らは普通に受け入れてくれていた。ちょっと感動的な光景だ。

「……」

てこうか、さつきから俺は変なおっさんじもの実況しかしていない。もはや別物の小説になってきている気がする……。

そんなメタ的な想いを抱きながらも、俺は必死にぬいぐるみどもを監視する。

「それじゃあ、さつそく始めましょうよ」

大阪城を今にもぶつ壊しに行きそうな黒髪魔法少女は、そう言い放つ。

……動きがあつたらあつたで腹たつけど、なればないで不安になるな。表情がない分。

「そうだね、『モラちゃん！魔法少女のお茶会恒例の、ゲームをやります！』

周囲のメンツからぱちぱちぱちと拍手が行われる。小鳩は怯えながらも、それに合わせる。

かまどさん（俺より明らかに年上）は、服のポケットから、お箸のようものを取り出した。

「ルールは簡単だよ！六本ある」この棒にはそれぞれ数字が書かれているけど、一本だけ「魔法少女」と書かれた棒がある。その棒を引いた人は、二つの数字を選んで好きな命令を魔法の力で下せちゃうの！」「

まんま王様ゲームやんけ！

「！」小鳩……

かつて散々あれな目にあつただけあって、王様ゲームだと気付いた星奈の顔色も変っていた。

しかも、今回は男五人の群れに放り込まれてしまっている。小鳩が、一人で。

何とかしなければ。俺は焦りながら、頭を働かせる。

「せーの、魔法少女だーれだ！」

だが時は非常なり。

かまどちゃんの一聲で、くしくも地獄のふたが開いたのだった。

厨編（後書き）

続きが遅くなつて申し訳ありません。

読んでいただいた方にはわかると思いますが、一部の人々にあらぬ誤解を招くような話になるかもと迷い、筆を置いていました。が、どうせ大した数の人も読まないだろうし、いいかということです書き上げさせてもらいます。

苦情があれば、そのつど対応を考えるということでおよしく述べ願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3605v/>

僕の妹が、こんなに友達が少ないわけがない

2011年10月8日12時31分発行